

平成十六年度(財)電源地域振興センターマーケティング調査事業活用事例

行政が住民グループの自立をバックアップ

女性の視点と行動力で地域の幸せづくり

長野県上田市丸子地域(旧丸子町)は、三つの温泉地を擁する丸子温泉郷が古くから湯治場として親しまれてきたまちです。しかし近年では観光客が減少し、町全体でも人口の流出や農家の高齢化が大きな問題となってきました。そこで立ち上がったのが、地元の旅館や農家の女性グループです。情熱に満ちた両グループは、行政の支援やアドバイスを受けながら「癒し」や「健康」をテーマにユニークな活動を展開しています。そして、女性グループの積極的な活動を行政がしっかりとバックアップ。今回は、温泉観光業と地元農業との連携で地域活性化に取り組んでいる上田市丸子地域にスポットを当てました。



お問い合わせ先
上田市丸子地域自治センター 地域振興課
TEL 0268-42-1011
http://www.city.ueda.nagano.jp/hp/mk/index.html

三つの温泉地を抱える古くからの湯治場

長野県の東部に位置する上田市丸子地域(旧丸子町)は、平成十八年三月に近隣の旧上田市・旧真田町、旧武石村と合併して新生・上田市の一員となりました。東に浅間山、南に蓼科山を望み、西の端は美ヶ原高原へ連なるこの地域には、約二十四千人が暮らしています。約百六平方キロメートルある総面積の七十パーセントを山林が占めますが、丸子地域の中央を東西に流れる依田川沿いには住宅や工場が建ち、農地が広がっています。年間の降水量は九百ミリと少なく、空気は乾燥して冷涼な気候です。地域には、東京電力株式会社の塩川水力発電所(八千百

ワット)があり、地域の電力供給に貢献しています。かつては製糸業が盛んで「糸の町・丸子」として知られていましたが、戦後は化学繊維などの普及で衰退。近年では自然環境を生かした精密機械、電機、食品などの工場が進出しています。農業においては耕地面積が少なく、ほとんどが兼業農家です。県花であるりんどうや薬用人参の生産でも知られ、リンゴやブドウの生産地でもあります。

西端の美ヶ原高原の裾には鹿教湯・大塩・霊泉寺の三つの温泉地があり、古くから湯治場として多くの人が訪れていました。この丸子温泉郷は環境省から「国民保養温泉地」と「国民保健温泉地」の指定を受けて

おり、脳卒中・骨関節疾患のリスクを低減する効果が期待されています。ハビリテーションでは全国屈指の設備と環境を持ち、温泉と医療を組み合わせた温泉療養所として草分け的な存在です。

観光客の減少と農家の高齢化に危機感

鹿教湯温泉には、医学的リハビリを中心に取り組んでいる「JA長野厚生連鹿教湯三才山リハビリテーションセンター鹿教湯病院」と、厚生労働省運動療法施設指定を受けている「クアハウスかけゆ」があります。これらを利用した温泉療養事業で、多い時には年間七十六万人というお客さんがやってくるなど、いわば何もみなくとも丸子温泉郷は賑わっていました。しかしバブル経済の崩壊

以後、長引く景気の低迷やお客さんの嗜好の多様化などの影響で、観光客は年々減少してきました。「温泉保養で訪れるお客さんが増えて、新規の観光客を増やす工夫をしてみよう」と、大きな原因だと思いついたのが、それに保養を目的としたリピーターが高齢化したのも原因のひとつ。観光客数はピーク時の六割くらいまで落ち込んでいます」と語るのは、上田市丸子地域自治センター長の小林健一さん。小林さんは旧丸子町役場では企画課長でした。「問題は観光業だけではありません。丸子では年々農家の数が減り、農業専従者の高齢化も進んでいます。若い人の専門農家は少なく、ほとんどが定年

合併話がマーケティング調査事業依頼のきっかけ

そのような状況の中で、旧丸子町では上田市・真田町・武石村との合併の話が進んでいました。小林さんは、まさにこの市町村合併に携わる担当者でした。「合併すれば丸子は新市の一部になり、中心ではなくなってしまう。今やらなければ、丸子の活性化は進まないと思



上田市丸子地域自治センターセンター長 小林 健一さん

いました。将来は財政のひっ迫が予想されるため、町が新たに補助金を出すのは難しい。その際に、頭に浮かんだのが活動費の補助が受けられる(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業でした。

役場の中でマーケティング調査事業を利用することに積極的だったのは、観光課と農林課でした。しかし、観光課は温泉客の増加対策を求め、農林課は農業の活性化策を求めたため、小林さんは両者の接点となる課題を見出し、活性化させるにはどうしたらよいかを模索しました。そして、何度も中部経済産業局と相談しながら、提出する書類の内容をまとめ、採択に結びつけたのです。

観光と農業の融合のための「癒し」と「健康」をテーマに

平成十六年、旧丸子町で「観

光業と農業の連携による商品開発と販売戦略」

を目的とした(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業が行われました。事業では旧丸子町役場が事務局として中心となり、地元観光分野と農業分野の代表者が議論を行う「検討会」と、両分野の実務担当者による「ワーキンググループ(作業部会)」を設置して検討を進めました。小林さんは「ワーキンググループ」のメンバーとして、従来から地元の観光業と農業の分野でそれぞれに活動していた二つの女性グループを選び、参加してもらいました。

「旅館や販売店を経営する人は、お客様相手に直接販売をしているのでどんどん前に進もうとする。農家の人は一年かけて作物を栽培するようにじっくりやろうとする。正反対のタイプですが、店の会計や家計を預り、将来に危機感を持つ奥さん同志ならなんとかなる」と小林さんは思ったそうです。

調査の中では丸子温泉郷の観光客アンケートによって得られた声をもとに、様々な観点か



遊休荒廃農地を有効活用した丸子陣場地区ワイン用ぶどう園地「マリコヴィンヤード」毎年秋には収穫祭が行われ、世界最高品質のワイン造りを目指す

ら検討が重ねられました。その結果、観光業が提供する温泉地のくつろぎ効果やもてなしの心、また、農業が提供する地元の新鮮で栄養豊かな食材。これらを結んで「癒し」と「健康」という共通テーマを掲げました。そして、新規商品として、地元の新鮮な食材を使った「丸子自慢料理」を開発し、これを直販所や旅館などで活用していくということになりました。

開発にあたっては、薬膳料理研究家の新倉久美子氏を先生として招聘し、アドバイスや講評をいただきながら、試作・試食を繰り返しました。また、観光客アンケートでニーズの高かった「森林浴」「里山歩き・ト

旅館や農家の女性たちが地域の活性化に立ち上がる

女性も家から外に出て何か始めてみよう

町の観光業を代表して「ワーキンググループ」に参加したのが「内村つねの会」です。この会は平成十五年十月に、丸子温泉郷とその周辺のホテル・旅館・商店、農家などの女性たち十五人ほどで結成され、現在は二十人以上のメンバーがいます。温泉客が年々減っていくのを何とかしなければと切実に感じていたのは、実は男性たちよりも会計を担当していた女性たちでした。そんな中、平成十四年に鹿教湯温泉の旅館のある女将さんが思いきった行動を起こしました。

「東京・巣鴨のどげぬき地蔵に行き、

やその周辺分野を含めた関係機関との連携などの具体的な提案がなされました。

女将さんがたった一人でピラを配ったんです。温泉保養のお客さんはお年寄りだと考えたからです。この行動自体は残念ながら即効を生み出すことはありませんでしたが、その熱意と行動力には感心しました。私たち女性ができることを、何かやってみようということになり、この会が結成されました」と当時を振り返るのは、「内村つねの会」会長の長岡和恵さん。内村は昔からの地名で、丸子温泉郷は昔からの地名で、丸子温泉郷は、内村温泉郷とも呼ばれていました。そこに住む娘(元気な女性)たちの集まりなので、「内村つねの会」と長岡さんが名付けました。

「私たち女性はずっと裏方に徹していましたが、男性たちに任せていても会合ばかりやって、ちつとも前進しない。このままではいけないと思い、仕事を終えた夜八時から、町の公民館やメンバーの旅館などに集まって

真剣に話し合いました。そしてまずは自分たちでお金を出し合っ、旅館やお店の情報を入れた丸子温泉郷のマップを作ったのです。しかし、夜に奥さんが外出することに「ご主人は快く思わず、その理解を得ることに一苦労だったそうです。」

女性ならではの視点でユニークな活動を展開

活動を始めた「内村っ娘の会」にとって、翌年の「ワーキンググループ」への参加は大きな転機となりました。会の顧問である斎藤繁子さんはこう振り返ります。

「ワーキンググループで改めて気づいたのは、町全体が衰退の危機を迎えているということ。単に旅館や店がお客様を呼ぶ工夫を考えるだけでなく、観光の原点を見直して、地域のことを考えなければいけない」と思いました。その意味で



内村っ娘の会 斎藤 繁子さん

も、丸子自慢料理の開発は、今まであまり交流のなかった農家の方たちと協力し合うことで、お互いの理解が深まり、とても有意義でした。また、薬膳料理研究家の新倉先生にお会いすることができたのも大きな収穫です。先生にはその後もいろいろと協力いただき、全国の様々な情報を教えていただいています。マーカーティング調査事業を通じて、地域ぐるみでの取り組みが必要だと感じた「内村っ娘の会」は、その後、長野県が行っている市町村や公共的団体等への支援制度「モンスズ支援金」(※1)を活用。地元農産物を使った「丸子温泉郷 旬の健康食レシピ」を紹介するホームページや小冊子を作成するなど、広い視野を持って情報発信しています。「新企画の『名所マップ』では、従来の名所にとらわれず地元



内村っ娘の会 長岡 和恵さん

の人おすすめの場所を取材して掲載し、あえて旅館や店の情報は一切入れていません。さらに現在は、丸子温泉郷の『人マップ』を企画中です。ここにこんな人が住んでいるとすぐ分かる。また、鹿教湯温泉の通り沿いの軒下で、温泉客に気軽に立ち寄ってもらえるお茶会席、お話しやしよを旅行会社とのタイアップで開催しています。地元の家料理を無料で提供し、お客さんと地元の人との交流を深めようと考えました」と斎藤さんは熱く語ってくれました。 ※1 長野県が県内の自律する市町村を支援するため「信州ルネッサン革命」推進事業(一律の基準による画一的な支援ではなく、市町村や公共的団体等を重点的に支援するもの)として平成十七年に創設した制度。

観光客を呼ぶにはまず地域が幸せであること

これらの活動は、新聞や地方紙、地元ケーブルテレビなどのマスコミに取り上げられ、多くの取材が来るようになりました。外部からの評価は、内部のメンバーたちの意欲を刺激するとともに、それまでなかなか理解が得られなかった男性たちの気持ちにも変化を与えま

循環型農業をめざす 女性たちのグループ

一方、町の農業を代表して「ワーキンググループ」に参加したのが「下丸子ステビアの会」です。この会の前身は、農家の主婦たち約七十人が集まって結成した婦人会。平成十三年に設置された下丸子地区の農産物直売所などで、有機栽培したキュウリやトマト、ピーマンなどの野菜を販売していました。

「私たちは、環境にやさしい循環型農業を取り入れていきます。米ぬかにEM(有用微生物)と糖蜜を混合して発酵させたものを、家庭から出た生ごみに加えて堆肥を作り、それを利用して作物を栽培しています」と語るのには「下丸子ステビアの会」会長の小林節子さん。同会は、丸子町農産物直売加工センター「あさつゆ」が平成十六年六月に新設されるのに先駆けて、平成十五年五月に婦人会の中から十八人が参加して結成されました。

「冬期には、店頭に並ぶ農産物が少なくなりません。そこで商品確保のために農産物を原料にした加工商品を作ってほし



下丸子ステビアの会 小林 節子さん

いという要望から、加工研究グループとして発足したのが「下丸子ステビアの会」でした。その名前は加工原料に天然甘味料ステビアを栽培して使用していることから付けました」と小林さん。とはいえ、メンバーはみんな一般の主婦で、加工商品を創作する料理の専門家はいません。下丸子地区にあった空き家を改装した加工場で、試行錯誤を重ねてようやく商品を作り上げたのです。

手作りの農産物加工品が「あさつゆ」で大評判に

こうして完成した菓子製品が大豆で作った「豆菓子」、小麦粉やきびごまなどで作った「のら菓子(かりんとう)です。同会では他に、おこわ、薄焼き(韓国の子デミ風のもの)といった商品も「あさつゆ」で販売しています。「どの商品も好評をいただい



下丸子ステビアの会 依田 貴美子さん

ています。『のら菓子』は「信州味のコンクール商品加工の部」に出品して優秀賞を受賞しました。二種類のお菓子は、明治神宮の銀杏祭りなど東京で行われるイベントをはじめ、各地から問い合わせが来ています」と、同じく「下丸子ステビアの会」の依田貴美子さんは話してくれました。「下丸子ステビアの会」の女性たちの活動も、「内村っ娘の会」のように当初はご主人たちから出しゃばり過ぎるようになってしまうといわれています。しかし「あさつゆ」での順調な売れ行きに、男性たちの意識も変わってきたということです。

「加工商品の原料は、調味料などを除いてほとんどが丸子産。会のメンバーのご主人が作っています。男性はとにかく女性に口を出されるのは嫌ですが、頼まれるのはうれしいみたいです。この原料はこのくら

丸子温泉郷について

丸子温泉郷にある三つの温泉は、それぞれ神秘的な伝説を持っています。国民保養温泉地として環境省から指定されている、全国でも数少ない温泉です。

●鹿教湯温泉

文殊菩薩に導かれた獵師が、矢で受けた傷を湯に入って治す鹿を見つけたことから、「鹿が教えた湯」としてこの名がついたといわれています。

●大塩温泉

戦国時代の天文年間に発見。武田信玄が川中島の合戦で負傷した兵の治療・湯治に利用したと伝えられ、「信玄の隠し湯」と呼ばれています。内村川南岸の田園地帯で湯煙をあげる、閑静な温泉です。

●霊泉寺温泉

古くに開けた湯で、謡曲「紅葉狩」に登場する平維茂が鬼女を退治した時に受けた傷をここで癒し、寺を建てて霊泉寺と名付けたと伝えられています。昔ながらの家族的な宿があります。



した。「出る釘は打たれる」といいますが、出過ぎた釘は打たれない(笑)。ようやく男性たちも、私たちの活動を認めてくれるようになりました。お客様は、そこに住んでいる人たちがいきいきと幸せな顔をしていないと観光地には来てくれません。地域が幸せだと、それを魅力に感じてまた来てくれるものだと思います。まず私たちが元気で

明るくなければいけません」と話す長岡さん。また斎藤さんも「やはり地域は運命共同体。地域を幸せにするには、地元に住む者が昔からの支え合いの心を再現することが大切ですね。農家の人も観光業に携わる人も、それぞれに培ってきたノウハウを持っています。この二つが協力すれば、今までにない大きな力になると思います」と口を揃えます。

農産物直売加工センター「あさつゆ」

「あさつゆ」は、丸子地域の農家が作った新鮮な作物や、加工食品、民芸品などを販売している直売所です。地域の運営組合員による経営で、延べ210名の生産者(農家)が作物などを提供。全て生産者が明記されており、生産者と消費者とのかけ橋となっています。店には毎日採れたての野菜や果物が並び、隣接の食堂では、地元産小麦を使った手打ちうどんを提供しています。

平成16年6月に誕生して以来、年々売り上げを伸ばしており、丸子地域の地産地消の大きな拠点です。

【お問い合わせ先】 あさつゆ TEL:0268-41-1062



い確保したいと注文すると、男性たちは一生懸命に頑張つて供給してくれます。そして、女性たちが加工商品として販売する。まさに地産地消そのものです。会のメンバーも自分たちの品物が売れることに手ごたえと生きがいを感じて張りきっています。

農業だけでなく地域の活性化への関心も高まる

マーカーティング調査事業に

参加したことで、「下丸子ステビアの会」も大きな影響を受けたいいいます。小林さんは、「内村っ娘の会」の積極的な姿勢には、大きな刺激を受けました。私たちの会のメンバーは高齢者が多いので、無理をしないで作るといのが基本ですが、それでも可能な限り新鮮で安全な食材を提供していこうと考えています。「内村っ娘の会」でも、私たちの活動を新聞や広報紙などで見て刺激を受けてお



られるとのこと。これからもお互いに励まし合いながら地域の幸せづくりを進めていきたいですね」と今後の抱負を語ります。また依田さんは「ワーキンググループに参加して、農業だけでなく私たちにも地域のために何かできるのではないかと考えました。現在、空き家を借りて「あさつゆ」に出す商品の加工場に行っていますが、その空いている部分をお年寄りが集まって楽しく過ごせる交流スペースとして利用しています。そういったアイデアを、これからも実現させていきたいと思っています」と目を細めました。

住民グループの熱意に行政も一杯応えていきたい

行政の立場からマーケティング調査事業における事務局としての支援のほか、県の各種補助金制度への申請など、住



上田市丸子地域自治センター 地域振興課 主事 澤山 みどりさん

民グループを支えてきたのが上田市丸子地域自治センターです。「それまではご自分の分野や、住む地域のことだけにとらわれがちだった住民グループの方たちが、マーケティング調査事業以降はもつと広く問題意識を持つようになり、熱意が高まってきたように感じます」と話すのは、同センター地域振興課の澤山みどりさん。澤山さんは、住民グループと接する窓口の業務を受け持ち、支援金や補助金の申請について相談を受けています。「行政への書類を作成するのが苦手という方は多いと思います。特にソフト面に関する活動は、その目的や効果を明記し、イメージを説明しなければならぬため、難しいですね。できるだけ分かりやすくアドバイスして、お力になれるよう努めています。最近では住民グループが積極的になり、自治センターとのつながりや連携も強くなってきたと言います。「行政へのアプローチの仕方について、「内村つ娘の会」と「下丸子ステビアの会」の皆さんは、マーケティング調査事業に参

膳料理を完成させ、小冊子にまとめました。一部の旅館では、すでにそのメニューをお客様への料理に採用し、好評を得ています。お客様の反応を見ながら、今後はこの薬膳料理をどのように活用していくか、さらなる検討が必要ですが、

成果と課題3 お年寄りのやりがい・生きがいの創成

丸子地域の多くは高齢者が農業を担っています。主に野菜などは自家用に栽培していましたが、「自分でつくったものを買ってもらえる喜び」「販売してお金が入る」という実感から、「あさつゆ」への出荷が増え、現在は観光業との連携に結ぶところまできました。「ステビアの会」は、丸子地域の住民提案型事業補助金を利用して、空き家を利用した高齢者のためのスペース「ステビア憩いの家」を開設しています。月一回、引きこもりがちなお年寄りを集めて健康相談や折り紙・押し花づくりなどをを行うもので、手作りのお菓子を出してふれあいの時間を過ごします。「帰宅して出

加したことがとても役に立つたとおっしゃっていました。この二つのグループの他にも、地域の活性化に取り組みされている方々はいらっしゃいます。その思いにお応えできるよう、私

まだスタート地点に立ったばかり 地域の継続的な連携が必要

平成十六年度に実施された(財)電源地域振興センターのマーケティング調査事業をきっかけとして、丸子地域では次のような成果が生まれ、課題が見つかりました。

成果と課題1 観光業と農業の交流で連携が生まれる

「ワーキンググループ」での活動がきっかけとなり、平成十七年に「内村つ娘の会」主催で数回開かれた「いなか食」の料理づくりと試食のイベント(「コモンズ支援金」を利用)に、「下丸子ステビアの会」が参加するなどの交流が生まれました。また丸子温泉郷の数の旅館が、農産物直売加工センター「あさつゆ」で販売される地元野菜や果物を購入して料

地域のみんなが助け合い 笑顔が輝く丸子に

「マーケティング調査事業は、合併して上田市の一部となった丸子地域が、これからのような方向性で進んで行くのかを考えるいいきっかけになりました。『癒し』と『健康』というテーマが見つかり、観光業と農業のコラボレーションという道筋もできてきました。しかし実際にそれをどう展開していくかが最も大切。丸子地域の活性化は、やつとスタート地点に立ったところだと考えています」と、丸子地域自治センター長の小林さんは自らに言い聞かせます。

さらに、「丸子地域には『内村つ娘の会』や『ステビアの会』だけでなく、他にも様々な分野の住民グループやボランティア組織があります。それぞれの趣旨や特色を把握して、スムーズかつ効果的に活動できるようにサポートしていくのが行政側の役割です。そのためには、どういったグループがどこにあって、どんな活動をしているのかを常に把握しておかなければなりません。丸子地域では公的な地域活性化協議会のような

たち行政側もいろいろな支援制度のメニューや、住民の皆さんと一緒に良い地域を目指すため、さらにフットワークを軽くし、頑張っていかなければならないと考えています。」

成果と課題2 丸子自慢料理の開発と実用化

「ワーキンググループ」活動の中で、薬膳料理研究家の新倉先生の指導・監修により地元旬の食材を使った「丸子自慢料理」が開発されました。試作品として秋の薬膳料理が創作されましたが、その後「内村つ娘の会」がそれを受け継ぎ、新倉先生の協力により「ふるさと薬膳」として四季の薬

なものには設けていませんが、住民グループの個々の活動が地域の人たちに理解されたいればいいと考えています。カタチではなく、何をやるかが肝心です」と小林さんは強調します。丸子地域自治センターでは、リハビリ施設を持つ病院やケアハウスとの連携による新たな温泉客の誘致メニューづくりや「信州国際音楽村」を核とした生涯学習活動の拠点づくり、加工用ぶどう畑の造成を端とする新たな産業ブランドづくりなど、地域振興を目的とした多くのアイデアを持っています。「例えば農作物の加工品づくりで、人手が足りずに量産できないのなら、地域の食品工場とのタイアップも可能。行政や住民グループ同士の連携で、可能性はどんどん膨らみます。途中であきらめることなく、地域のみんなが助け合いながら、たとえ地味でも継続的に活動を行っていけば道は開けるはずですよ」と小林さん。



鹿教湯温泉の見どころ「氷灯ろう夢祈願」

「氷灯ろう夢祈願」は、毎冬の十二月から二月にかけて鹿教湯温泉・五台橋周辺で行われています。道路両側に並べられた氷製の手作り灯ろうに火を灯し、神秘的で風情ある夜の温泉街を楽しみながら歩くイベントです。毎日夕方に、たいまつを使って「夢の成就を祈願しながら」一つ一つ点火。誰もが点火に参加でき、訪れた温泉客の楽しみとなっています。イベントには、人とふれあい、自然とふれあいながら、充実したひとときを過ごしてほしいという願いが込められています。

【お問い合わせ先】 鹿教湯温泉観光協会事務局 TEL:0268-44-2331



丸子自慢料理「ふるさと薬膳」

美ヶ原の野草の80%は薬草であると言われています。その裾にある丸子温泉郷では、昔から地元で採れる新鮮な旬の食材によって健康的な食文化が育まれてきました。日本の食養生の基本として「身土不二」という言葉があり、これには心身と風土とは一体であるという意味が込められています。つまりその季節に採れる旬のもの食べることが、人の健康に最も良いということです。また、中国では薬と食べ物はその源が同じであるという「薬食同源」という考え方があり、長い歴史の中で薬膳料理が生まれています。丸子自慢料理「ふるさと薬膳」はこの二つの理念を基に開発されました。